

[039_1998]第三十九回中央図書館貴重文物展観目録 ：東西の古医書に見られる身体：九州大学所蔵の資料から

九州大学附属図書館中央図書館

ミヒェル, ヴォルフガング
九州大学言語文化部：教授

<https://doi.org/10.15017/1485026>

出版情報：大学広報. 877, pp.1-25, 1997-11-05. The Committee of Public Relations Kyushu University

バージョン：

権利関係：

平成10年度 開学記念貴重文物展観

(中央図書館)

日 時：平成10年5月11日(月)～17日(日) 10：00～16：00

場 所：九州大学附属図書館 二階自由閲覧室

展観資料の選定、解説、配列につきましては、言語文化部 ヴォルフガング・ミヒェル教授に全面的なご尽力をいただきました。

「東西の古医書に見られる身体」

——九州大学の資料から——

医書は医療に携わる人々のための単なる専門書だけではない。これらの書物が何についてどういうふうに述べているのか、それとも、何について述べていないのか、このことは歴史上のそれぞれその時代および文化における人間観、世界観を反映してきている。その答えには様々な違いや変化がみられるが、医書の背後にある基本的な問いは何世紀にもわたってほとんど変わっていない。病気とは何か。健康とは何か。生とは、死とは何か。人間と自然（外界、宇宙など）との関係、また身体と精神（心など）との関係はどうなっているのか。

本展示会では、九州大学所蔵の古医書を中心に、身体観の発展史における幾つかの現象を紹介する。

1. 小宇宙としての身体
2. 体内を観察しない中世のヨーロッパ人
3. 新世界の探検
4. 人生の空しさ
5. 筋肉の「美」
6. 固定観念にとらわれていた学問
7. 身体を教える
8. 気流れる身体
9. 西へ伝わる東洋医学
10. 東へ伝わる西洋医学
11. 新しい生命のイメージ
12. 身体を語ることば
13. 百科事典に見られる身体

1. 小宇宙としての身体

古代の医学にも様々な流派があったが、ヨーロッパで最も大きな影響を与えたのは、ヒポクラテス（紀元前460頃—377頃）とガレノス（130頃—200頃）並びに、その信奉者たちだった。ヒポクラテスは、超自然的な病因や魔術による療法を排除し、医学を「自然科学」へと導いた。しかし、彼の考えにも思弁的な要素が少なからずみられた。

☞ ヒポクラテスのイメージ像。「ヒポクラテスの誓い」は医道を語った千古不朽の名言である。（『ヒポクラテス全集』ジュネーブ、1657年）

(Magni Hippocratis Medicorum Omnium Facile Principis Opera [...]. Tom. I, II. Geneva, Typis & Sumptibus Samuelis Chouët, M. D. C. LVII)

病気にかかるとき

万物は火、風、水、地の4元素からなるとしたエンペドクレス（前490頃—430頃）の説を思わせる体液病理説 (humoral pathology) が広まっていた。この説によると体液は栄養摂取による物質代謝の産物で、4原液が正常混合の場合、人間は健康であるが、異常混合になると病気が発生する。環境、生活様式、体質が病因となるのである。病気は3段階に分けられている：

- (a) 未熟期：体液の変化
- (b) 成熟期：体液の「沸騰」
- (c) 分離期：発症（病原体の排除により治癒するか、または下半身に沈着して慢性病になる）

上記の体液論に加え、東洋医学の「気」に類似する「プノイマ」(pneuma) も古代の病理学に大きな影響を与えた。

☞ 西洋の伝統医学における対応の原則：4要素、4体液と4性質。これらの均衡が崩れたら、相対する性質を持つ薬品を用いてバランスを取り戻す。

ガレノスはこの学説を受け継ぎ、他の諸説と共に、総合的な理論体系を組み立てようと試みた。彼の病理学も基本的には体液論に基づくものであった。それはやがて、中世の西洋医学の基盤になったばかりでなく、ルネサンス以後の近代化にも関わらず、19世紀に至るまで医学思想のあらゆる分野で影響を及ぼすことになった。

☞ 4原液はパレの著作にも見られる（パレ『全集』パリ、1582刊）(Paré, Ambroise: Opera. Parisiis: Apud Jacobum Du-Puys. 1582)

身体を中心としての心臓

ギリシア・ガレノス流の医学によれば、心臓はいわゆる先天性の温熱 (calidum innatum) を持っている。この温熱は4体液を動かし、その活動を維持する。その際に消費する温熱は飲食で

補えるが、決して完全ではない。人生の終わりにはこの熱がなくなり、死人は冷たくなる。ヘロフィロス（前300頃—？）のように、当時すでに、思考の中樞は脳であると唱える人もいたが、一般には、熱を恵む太陽が大宇宙の中心にあるように、心臓が身体という小宇宙の中心器官であるとされていた。キリスト教においては、人間の魂は心臓にあると考えられていた。

近代医学により心臓はただの「血液ポンプ」に過ぎないことがわかって、西洋には今もって、心臓が人間の中心であったことを示すしぐさが残っている。

☞ しぐさの写真

かつて、あくびは不可解な現象だった。ヨーロッパではこの瞬間に魂が体内から逃げ出すと信じられ、これを防ぐために手を口にあてた。

2. 体内を観察しないヨーロッパ人

中世の西洋医学は文献学で、その中心は研究室や病院ではなく、図書館であった。大学の博士たち (doctores) の主な仕事は古典の解釈であり、体系的な観察や実験は行わなかった。

もちろん、戦争、処刑や事故の際には身体の内部に目を向ける機会もあったが、「見る」ことは「観察する」ことや「理解する」ことではなかった。学者にとって「重要」だったのは、古典によって「知られている」事柄であった。もちろん彼らも、まだ多くを知り得ていないことは承知していたが、それでも神はこの世の全てを賢明に意味づけて創造されたと考えていた。万物はこの秩序の中でそれぞれの座を占めているのである。そのため全てを詮索して知る必要はなかった。医師たちは自分のことを好んで「仲介者」、「まとめ役」、「調停者」などという「添え名」で呼んだ。

ガレノスの時代から外科学と医学は次第に分かれて発展するようになった。「教会は血を忌む」(ecclesia abhorret a sanguine) と表明して、ツールの教会会議は1163年、たいていが聖職者だった医師の手から外科学を奪った。それ以降実際に患者を治療するのは床屋外科医、結石摘出師、施術師、行商医、薬草老婆、吸玉師、骨つぎ、検尿者、ヘルニア整復師、魔女、悪魔払いなど、大学教育を受けない人物になった。

☞ 「目で見た解剖学的構造」(Augenscheinliche Anatomy)。お粗末な内臓を描いた瀉血図。(ゲルスドルフ『傷手当の便覧』1517年。復刻版)(Gersdorff, Hans von: Feldbuch der Wundartzney. 1517)

16世紀までの外科医学書に掲載されている挿し絵は、患者の治療を物語形式で示していることが多い：

兵士が戦場で矢に当たる。外科医は矢の後部を切り取って引き抜こうとしている。麻酔剤はまだ知られていなかった。木版に彫られた短詩の中で負傷者は神に呼びかけ、勇気を乞うている。

☞ ニコラウス『ラテン語からギリシア語に翻訳されたガレノスの著作』フェラリア、1509年 (Nicolaus, Leonicens: In libros Galeni e Graeca in Latinam linguam a se translatos praefatio communis. Ferrariae, Per Joanem, 1509)

医学の権威ガレノスの著作はおびただしい数の版が出版されており、それについての解釈も繰り返し行われていた。これはその1例だが、この本の所有者はそれでも詳細な注釈が施された本文に、さらに注釈を加えている。知識人の国際語はラテン語であり、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語で医書を出版することは極めて異例のことであった。

☞ ファロップピオ『解剖学的観察』ヴェニス、1562年 (Faloppio, Gabriello: Observationes anatomicae. Venetiis: Apud Marcum Antonium Ulmum, 1562)

伝統を重んずる解剖書は、16世紀に入ってからでも図が付されていなかったものが多い。

☞ 古典を重んずる解剖学。ポローニャの医師モンディーノ・デ・ルツツイ (Mondino de Luzzi, 1326年没) による手稿のイタリア語訳より (Fasciculo di Medicinae, Venezia 1493)

教会は死体解剖を正式に禁止したことは1度もなかったが、13世紀までは解剖学の発展は見られなかった。それ以降、法医学やその他の理由からポローニャ、フィレンツェ、モンプリエ、アヴィニオンでは解剖は行われていた。にもかかわらず医師たちは自らの目で観察するのではなく、ガレノスが記した事だけを見ていた。解剖が行われている間、教授はガレノスを読み上げ、外科医が身体を開いた。その後教授が器官を示して「5分葉の肝臓」や、その他ガレノス解剖学の不思議を説明した。

中世のヨーロッパが立証したことは、古代エジプトやバビロニア、アステカ帝国でも見られる。身体を開いただけでは、解剖学の知識が増えることにはならなかった。

3. 新世界の探検

アンドレアス・ヴェザリウス (1514—1564) やその後の解剖学における先駆者たちにより、伝統的な人体像が覆り、死体解剖による直接の観察が行われるようになった。身体の構造は大宇宙の構造とは今や何の関係もないものとなった。すでにヴェザリウスはガレノスの誤りを200ヶ所訂正し、新たな方法の優越性を証明した。細かな内容と豪華な図は前代未聞のもので、18世紀まで世界各地に大きな影響を及ぼした。

☞ ヴェザリウスの解剖書の口絵。新しい解剖学を讃える16、17世紀の医書には死体を解剖する医師の絵がよく見られる。(ヴェザリウス『人間の身体の構造』ヴェニス、1568年版) (Vesalius, Andrea: De Humani Corporis Fabrica. Venetiis, Franciscum Franciscium & Ioannem Criegher Germanum, 1568.)

死体解剖は新しい学問を象徴するものとなった。16世紀以来ヨーロッパの大学ではいわゆる「解剖学劇場」(Theatrum anatomicum = 解剖学教室)が広まった。ここで行われた死体解剖は長い間、学生や医学者のための専門的な授業だけではなく、社会的な催し物にもなっていた。解剖の行われる日時は全市に知らされ、「観客」は入場料を支払わねばならなかった。教授は人体の奇跡を披露するとともに、このような秘密を解き明かすことのできる人間の理性も賞讃した。

☞ ヴェスリング『解剖学の体系』パドゥア、1651年。(Veslingius, Joannes: Syntagma anatomicum. 2. ed. ab extrema auctoris manu Patavii Typis Pauli Frambotti, 1651) ジョヴァンニ・ジョルジのタイトル銅版画に見られる円形階段教室はパドゥア大学に現存している。ヨーハン・ヴェスリング(1598—1649)は同大学の教授として解剖学の講座を担当していた。前任者にはヴェザリウスもいる。1641年に初版が発刊された『解剖学の体系』は日本にも輸入され、小杉玄適(1734—1791)と山脇東洋(1705—1762)による1754年の画期的な死体解剖の際に用いられた、とされている。

☞ 演劇としての解剖。ライデン大学の解剖学劇場を建築したペーテル・パーウがヴェザリウスのポーズを真似ている。(Paaw, Peter: Succenturiatus anatomicus. Leiden 1616)

アムボラズ・パレー(Ambroise Paré, 1510—1590)はルネサンス時代のフランスの名医である。フランス語の初版は1562年リヨン刊で再版を重ね、1841年のマルゲーニエ(Malgaigne)校訂本を最終とする。諸国語に訳され、ラテン語版は8種ある。日本へは江戸初期にバトゥス(C. Battus)によるオランダ語版が輸入されて和蘭流外科に影響を与え、不完全ながら抄訳もある。

☞ 近世外科学の源となったパレーの『大外科学全集』(ラテン語訳、パリ、1582年)(Paré, Ambroise: Opera. Parisiis: Apud Jacobum Du-Puys. 1582)

イギリス人医師ハーヴェイ(William Harvey, 1578—1657)が人体の血液循環説を発見したことも、ガレノス医学を克服する上で大きな役割を果たした。ガレノス医学では肝臓で発生した血液は各部まで移動するが、そこで消費されるため、循環することはない。ハーヴェイは、心臓によって送り出される大量の血液が肝



臓内で常に作られ得るものではないと見抜いていた。つまり、血液は循環しており、一方向に流れているはずである。実験により彼はこの命題を立証した。大静脈を結紮すれば、心臓には血液がなくなる。大動脈を結紮すれば、血液は心臓に停滞する。これによってガレノス説の中核が覆ったというだけではない。純粹に自然科学的な方法が医学においても初めて成功を収めたのである。

☞ ヴェスリング『解剖学の体系』アムステルダム、1659年。(Vesling, Johannes: *Johannis Veslingii, Mindani [...] Syntagma Anatomicum, Commentariis Illustratum a Gerardo Leonardi Blasio, Amstelod. Medicinae Doctore, & in Patria Practico. Amstelodami, Apud Joannem Janssonium, Anno MDCLIX*)

著者は町（アムステルダム）の有力者たちに人体の解剖を見せている。この書では腐りかけた死体を死の象徴としている。扉の上には外科用の器具。ヴェスリングは、激しい論争の的になっていたハーヴェイの血液循環説を支持した最初の学者であった。

☞ レーウエンフクの単式顕微鏡（レプリカ、京都市和田和代史氏蔵）

1590年にオランダの眼鏡商ヤンセン父子が、史上初の顕微鏡を開発したとされている。その70年後にイギリス人学者ロバート・フック（Robert Hooke、1635—1703）が対物レンズ、接眼レンズ、照明装置などを備えた最初の複式顕微鏡を開発した。1665年には『ミクログラフィア』（*Micrographia*）を刊行する。ここでは *cella*（細胞）という言葉が生物学的な意味で初めて用いられた。1673年頃からオランダの亜麻布商人レーウエンフク（*Antonij van Leuwenhoek*、1632—1723）が1枚のレンズを組み込んだ単式顕微鏡を製造している。金属板の裏面の針先に虫などをつけ、光にかざして見るものである。この顕微鏡の倍率は266倍にも達し、当時の複式顕微鏡よりも性能はすぐれていた。レーウエンフクは赤血球、精子、細菌などを発見し、ロンドンの王立教会の機関誌に画期的な報告を載せた。16世紀の解剖学上の新発見は肉眼によってのみなされていたが、17世紀には次第に顕微鏡が用いられるようになった。

☞ パルフェイン『外科用人体解剖学』ライデン、1733年。(Johann Palfyn: *Heelkonstige Ontleding van 's Menschen Lichaam. Leyden, Jan en Hendrik vander Deyster, 1733*)

ヨーハン・パルフェイン（*Johan Palfyn*、1650—1730）はベルギーの解剖学者で産科鉗子の発明者である。初版は1719年に刊行、本書は1733年のライデン刊。著者は外科医の出身で、東フランドルのガン外科学校において20年以上も外科学と解剖学を講義しており、その教科書として著したものであろう。内容は7篇に分かれ、形体のみならず機能や病因にまで紹介している。日本では江戸時代に重んじられ、特に京都の小石元俊は同志や門人にも利用させ、ついにはその翻訳を完成させた。

☞ トーマス・バルトリン『人体解剖学』（オランダ語訳、ライデン、1653年）（*Anatomia ofte Ontleding des Menschelijken Lichaems; door Dr. Thomas Bartholyn [...] In de Nederdytsche spraek overgeset, Door Mr. Thomas Staffard, Chirurgijn. Tot Leyden, François Hackes, Anno 1653*）

デンマークの解剖学者トーマス・バルトリン（Thomas Bartholin、1616—1680）が、父カスパルの解剖書を改訂したもの。日本ではスタッファードによるオランダ語訳が用いられた。蘭学者桂川甫周（1751—1809）の蔵書は『解体新書』の参考書にもなっている。清の康熙帝の勅命で満州語に翻訳された『欽定格体全録』にも本書の解剖図が多くとり入れられている。

☞ モルガーニ『解剖学の便覧』パドヴァ、1719年。（*Morgagni, Giovanni Battista: Adversaria anatomica omnia. Patavii: Josphus Cominus MDCCXIX*）

イタリアの解剖学者モルガーニ（1682—1771）は近代病理学の創始者とも言われている。1711年、パドヴァ大学の内科学教授に推され、4年後に同大学の解剖学教授となった。解剖学の名称にはモルガーニの名を冠したものが多く残っている。80歳の時に出版した『解剖所見による病気の所在と原因について』（*De sedibus et cariis morborum per anatomen indagatis. 1761*）で、病理解剖学をうち立てたとして有名である。ヴェザリウスが新しい解剖学の基礎を築き上げたパドヴァ大学で、200年後にモルガーニが再び新しい分野を切り開いたということは注目に値する。

☞ 器官別の記述形式とラテン語離れ。ベイリー『人体の最も重要な諸部分の病理解剖学』ロンドン、1812年。（*Baillie, Matthew: The morbid anatomy of some of the most important parts of the human body, divided into ten fasciculi: a series of engravings, accompanied with explanations, which are intendet to illustrate. 2. ed. London: W. Bulmer, 1812*）

グラスゴー大学で医学を学んだベイリー（1761—1823）はロンドンで叔父ウィリアム・ハンター（William Hunter）の解剖室に勤め、すぐれた解剖学者、外科医に成長した。彼が英語で書いたこの著書は器官別という記述形式を初めて採用した本格的な病理解剖学の最初の教科書として歴史に名を残すものである。

抵抗する真実

アリストテレス学派の信奉者は、真実はいずれ自ずと人に知られるものだ、と信じていた。しかし啓蒙により、この信念も失せることとなってしまふ。真実は、そのベールをはがさなければならぬ。人間が目を向ける対象は御しがたいものである。知識とは、抵抗し、御すことの叶わない対象と戦いながら獲得しなければならないものなのである。

4. 人生の空しさ

挿し絵の形式

ルネサンス以降の医学書には3種類の挿し絵が見られる。第1の型は身体だけでなく、死体が解剖された過程も示している。これをヨーロッパでは「生きた解剖学」と呼ぶ。

☞ 解剖のためにつるされた死体。16世紀の著者がよく行ったように、プラテルスもヴェザリウスの書から挿し絵を引用している。プラテルス『人体の構造としくみ』バーゼル、1583年。(Platerus, Felix: De corporis humani structura et usu. [Basileae]: Ex Officina Frobeniana per Ambrosium Frob., 1583)

死を演ずる

第2の型は単なる身体の描写を越えている。中世の木版画が禍福の小史を物語っていたように、これらの図も人生観を表している。人物はたいてい風景の中に立っていて、建物や墓碑、人物の姿勢などがギリシア・ローマの古典を思わせる。テーマとしては苦悩、悲しみ、後悔、憂鬱のような心理状態や、死神や墓掘人、墓碑のように死を暗示するものも多い。人間の身体は美しく力強いが、永遠ではない。



☞ 死神を思わせる人間の骨格。砂時計は人生の短さを表す。(カウパー『人体の解剖学』オックスフォード、1698年)

(Cowper, William: The anatomy of humane bodies, with figures drawn after the life by forme off the best masters in Europe, and curiously engraven in one hundred and fourteen copper plates, illustrated with large explications, containing many new anatomical discoveries, and chirurgical observations. To which is added an introduction explaining the animal economy, with a copious index. Oxford: Theater, 1698)

☞ 音楽家の頭蓋骨。(カウパー『人体の解剖学』オックスフォード、1698年)(Cowper, William: The anatomy of humane bodies.)

☞ 人間の骨格が墓掘人としてすきを持つ。(ヴェザリウス『人間の身体の構造』ヴェニス、1568年版)(Vesalius, Andrea: De Humani Corporis Fabrica. Venetiis, Franciscum Franciscium & Ioannem Criegher Germanum, 1568.)

☞ 日本の古文書に見られるすきを持つ人間の骨格。ヴェザリウスの図はオランダ語版「パ

レ全集」を經由して日本に伝わり、檜林鎮山（1648—1711）の『紅夷外科宗伝』に収録されている。（檜林鎮山『紅夷外科宗伝』宝永3年著、1706年、京都大学蔵書）

☞ 墓地を出る骸骨。最後の審判の時に死者が復活する場面を連想させる。（カウパー『人体の解剖学』オックスフォード、1698年）（Cowper, William: *The anatomy of humane bodies.*）

☞ 思案する骨格。石碑文「精神は生き続け、他はみな死に至る」（ヴェザリウス『人間の身体の構造』ヴェニス、1568年版）（Vesalius, Andrea: *De Humani Corporis Fabrica. Venetiis, Franciscum Franciscum & Ioannem Criegher Germanum, 1568*）

☞ 悲しみと苦悩のあまり両手をよじる骸骨。（ヴェザリウス『人間の身体の構造』ヴェニス、1568年版）（Vesalius, Andrea: *De Humani Corporis Fabrica. Venetiis, Franciscum Franciscum & Ioannem Criegher Germanum, 1568*）

☞ ベレティニは人物を具体的な状況に置きながら、身体のできるだけ多くの面を示そうとしている。手法として人物が持つ臓器、鏡、絵画などを用いている。（ベレティニ『解剖学の図』ローマ、1741年）（Berrettini, Pietro da Cortona: *Tabulae anatomicae. Romae: Typographia Antonii de Rubeis, 1741*）

図表

第3の図では身体がほとんど解体されている。部位は比較、規定、分類されて一面に広がっている。この型は今日でも医学だけでなく学術書に広く用いられている。ここには当該の問題に無関係なものは何もない。この「冷たく」客観的な視点には多くの長所があり、大きな成功を収めた。しかしここでは「全体」や、背後にいる人間が忘れられがちになる。

☞ 近代の学術的な図の典型としての「図表」（Tableau）：豚、羊、ヒトの喉頭の比較。（ファブリキウス『全集』ライデン、1738年）（Fabricius Ab Aquapendente, Hieronymus: *Opera Omnia Anatomica Et Physiologica. Lugduni Batavorum, Johannem van Kerckhem, 1738*）

5. 筋肉の「美」

女性の身体を示す際に、筋肉は東洋でも西洋でも決して重要視されることはなかった。「柔軟性」と「丸み」が今日でも「女性的」なものとしては重要な特徴になっている。男性の場合には、ギリシア彫刻においてすでに血管と筋肉が次第に目につくようになってくる。これらは力、活力、健康を象徴していた。これらの像は、スポーツをしていたり、敵や動物と戦っている場合を除くと、たいていは力強さを印象づけようとしている姿勢である。その際、身体の重心は立脚に置か

れ、遊脚は軽く曲げて添えられている。ポリュクレイトスが発見したこの表現法はヨーロッパ彫刻の基本的形体となる。両腕も単に伸ばすのではなく、どこか一点を指している。

☞ アゲサンドゥロス、アタノドロス、ポリュドロス合作：ラオコン。(ヴァティカーノ美術館、高184cm。水田徹「世界美術大全集」第4巻ギリシア・クラシックとヘレニズム、小学館、1995年)

☞ muscle<ラテン語 musculus は小鼠の意。筋肉の動きはまるで小鼠が皮膚の下を走り回っているようだったのである。

中世は、教会による「身体敵視」の影響下にあった。教会は裸体や性を罪悪と結びつけ、脅威となりかねない身体の自然な動きを規制しようとした。美術においても人物の裸体は宗教的なテーマに関連したものだけとなった(十字架上のキリスト、アダムとイヴ)。ゴシック建築に見られる垂直性の強調は人体の釣り合いにも影響を与えた。

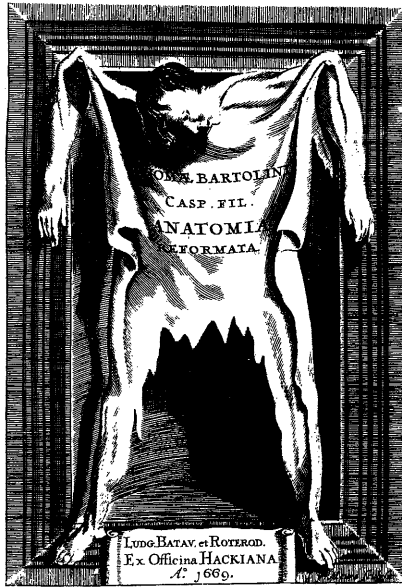
☞ ゴシック式のアダムとイヴ。ドイツ・バムベルクの大聖堂。(Bammes, Gottfried: Akt. Belser Verlag, Stuttgart, Zürich, 1992)

エコルシェ (キリスト教の筋肉男)

キリスト教の伝説によれば、あるアルメニア王は12使徒の一人、聖バルトロマイで、生きながら皮を剥がれ、斬首された。そのため、中世の挿し絵でのバルトロマイはメスを、後には剥がされた皮膚も手にしている。16世紀には「筋肉男」としてのバルトロマイ像が登場した。ヴァルヴェルデスの木版画が特に有名であるが、皮を剥がれた男の彫刻や蠟人形も作られた。エコルシェ(フランス語 Écorché ラテン語<exorticare=剥皮する)と呼ばれたこの筋肉男は次第に解剖学の象徴となり、多くの学院で見られるようになった。

☞ ワルエルダの「エコルシェ」。(『ヴェザリウスおよびワルエルダの解剖学 — 人体の各部の図および解説』アムステルダム、1647。)(A. Vesalii en Valuerda Anatomie ofte Afbeeldinghe van de Deelen des Menschelicken Lichaems, en derselver verclaringe. Met een Aenwysinghe om het selve te onleden volgens de leringe Galleni, Vesalii, Fallopii en Arantii. 'T Amsterdam, By Corneliz Danckertzz, in de Calverstaet in de Danckbaerheyt M. DC. XLVII)

☞ 「エコルシェ」伝統の影響は見られるが、この筋肉男が手にしている皮膚は、皮膚に見えなくなっている。(Cowper, William: Myotomia reformata, or, An anatomical treatise on the muscles of the human body. To which is prefix'd an introduction concerning muscular motion. London: Robert Knaplock, and William and John Innys, 1724)



☞ トマス・バルトリンは父カスパーの研究を引き継ぎ、発展させた。この書はハーヴェイの血液循環説に対する賛辞に満ちている。若い男の皮膚がつるさされている口絵は、様々な連想を引き起こす。バルトロマイの物語のようにも思われるが、バルトリン自身と父親との複雑な関係を示唆した可能性もある。(Thomae Bartholini Casp. F. Anatomia, Ex Caspari Bartholini Parentis Institutionibus, Omniumque Recentiorum & propriis Observationibus. Tertium ad sanguinis Circulationem Reformata. Cum Iconibus novis accuratissimis. Lugduni Batavorum & Roterod. Ex Officina Hackiana. MDCLXIX)

死体解剖と芸術

ルネサンス期にギリシア・ローマの古典が再評価され、人物の（裸）体がようやく芸術家や学者の視界に入るようになる。レオナルド・ダ・ヴィンチもその先駆者に数えられる。

☞ 1490年代から、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci, 1452–1519) がミラノ及びフィレンツェで人体の解剖を行い、身体の新しい描写法を生み出した。この詳細で写実的で美しい解剖図は、美術と学問を融合するルネサンス精神の典型となった。レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖手稿 (ウィンザー王室図書館収蔵の複製。日本語版監修：山田致知。1982年、岩波書店発行。限定版)

16世紀から18世紀にかけての解剖書はその多くが、医学と芸術の出会いの場となった。才能豊かな画家がいなければヴァザリウスの書もその価値は半減しただろう。また16世紀の木版画も学問に用いられることでその絶頂期に達した。古典の表現方法は「新解剖学」の挿し絵に大きな影響を及ぼした。ルネサンス以来芸術家は彼らなりに解剖学を熱心に学び、身体をより正確に力強く表現しようとした。

☞ ヴェザリウスのモチーフを利用した美術教科書。(ド・ピール『彫刻および絵画のための解剖学の概要』パリ1760年) (Piles, Roger de: *Abregé d'anatomie accommodé aux arts de peinture et des sculpture*. Paris: J. B. Crepy, 1760)

☞ ド・ピール『彫刻および絵画のための解剖学の概要』パリ1760年

東洋の「筋肉男」

東洋医学の書に表れる人間の図の多くは両足を広げてしっかりと大地につけ、両腕は胴からいくらか離れている。このように非常に静止した姿勢があるかと思うと、座ったり動いたりしている図も見られる。それでも上半身はほとんど構成がなされていない。春画でも性器を除けば、筋肉や血管は見られない。仏教彫刻では一定の像(十二神将、蔵王権現)で筋肉がかなり強調されていて興味深い。

☞ 興福寺東金堂十二神将立像。(週刊朝日百科、「日本の国宝」98年3月22日)

☞ 左：金剛力士像(吽形) 右：金剛力士像(阿形)(奈良六大寺大観刊行会「奈良六大寺大観」第8巻、岩波書店、1990年)

今世紀後半になると、筋肉は男性の身体を評価するうえで次第に大きな要素になってきている。筋肉の大きさと鮮明さ(definition)は美や力、魅力を測る基準となった。ここにはヨーロッパ古典の要素がいくらか見られるものの、同時に、筋肉の量を強調するあまり、釣り合いのよさや柔軟な動きが損なわれている。

☞ 「ポーズをとる」ボディビルダー(『ボディビルディング』1998年6月号)

6. 固定観念にとらわれていた学問

いわゆる「固定観念」からの逸脱はどここの社会や集団においても、同情に始まり拒否、攻撃、排除といったさまざまな反応を呼び起こす。ヨーロッパでも学問と単なるセンセーションの区別ができない医学者がおり、特に17-19世紀には、「珍しい」事象の「観察」を紹介する医書が数多く出版された。

☞ 「シャム双生児」の骨格(ワルター『解剖学的観察』ベルリン、1775年)
(Walter, Johann Gottlieb: *Observationes anatomicae*. Berolini Apud Gottlieb Augustum Lange, 1775.)

☞ 胎児の奇形 (ベーマー『珍しい解剖学的観察』ハレ、1756年) (Boehmer, Philipp Adolf: *Observationum anatomicarum rariorum fasciculus alter notabilia circa uterum humanum continens cum figuris ad vivum expressis. Halae Magdeburgicae: Apud Joannem Justinum Gebaverum, 1756*)

国家主義や植民地政策の時代に、民族や人種、国家が次第に強調され、ヨーロッパの解剖学でもこの現象を「科学的に」掌握しようという試みが目立ち始める。サンディフォールはトルコ人やブッシュマン、ホッテントット、ユダヤ人、中国人、ウェールズ人、エチオピア人などの頭蓋骨を並べて計測し、その特徴的な差違を示そうとした。

☞ ライデンのシーボルト・コレクションから日本人の頭蓋骨。(Sandifort, Gerardus: *Tabulae craniorum diversarum nationum. Lugduni Batavorum. Apud S. et J. Luchtmans, 1838*)

7. 身体を教える

医学史上、人体に関する知識を伝えるために様々な手段が発達した：書物の挿し絵、木や蠟、紙による模型、塑像、死体解剖、標本など。新しいものとしてはハイデルベルクの解剖学者ギュンテル・ヴォン・ハーゲンス (von Hagen) のプラティネーションや、学生および一般向けのコンピュータ・プログラムがある。

解剖学の教育用の陶器模型 (医学部解剖学教室蔵)

☞ 新生児の繊維経過、中脳髄、延髄の解説用モデル (サビン博士の板モデルに依る)

☞ カル・ペータ教授の板モデルによる人顔面の発育のためのモデル。4週末、5週始め胎児、頂尾長6mm、50倍拡大。脳と感覚器官の発育は進んでいる。内臓弓は容積を減じ、細かく分けられ全体のレリーフは増えている。ドイツ製。

☞ 上半身 (陶器)

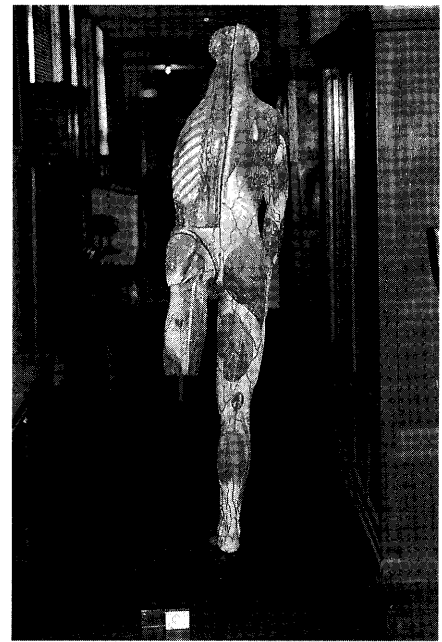
☞ 医学部卒業生のアルバムから

☞ キュンストレーキ (人工死体)

16世紀に新解剖学が登場して以来、死体が慢性的に不足していた。そのため、学生や学者たちの指導用に等身大の立体的な人型を蠟で作るようになった。しかしこれには、高価で、また手を

触れられないという大きな欠点があった。それで19世紀初めにフランス人解剖学者オズー (Louis T. J. Auzoux, 1797—1880) が紙製の安価な人型を作った。日本ではオランダ語起源の名称キュンストレーキ (kunstrijk、人工死体) で知られている。まもなく日本でも製作されるようになり、その正確さにおいてはオズーに決して劣らない。

現在キュンストレーキは金沢に1体、福井に2体、長崎に1体が保存されている。昨年、九州大学にも1体キュンストレーキが残っていることが確認できた。



☞ オズー博士の「分解できる解剖模型」(Homme Clastique)

☞ 国産キュンストレーキの広告「東京医事新誌」明治17年4月26日

8. 気流れる身体

西洋では身体 (ギリシャ語 soma) と魂 (ギリシャ語 psyche) はすでに古代から分離したものであった。このことは、一方では体内を観察することへの躊躇を少なくし、医学の発達を可能にしたが、他方、病気はますます純粹に身体的、物質的現象として捉えられるようになった。西洋では今世紀になって、心身医学のような新しい分野が誕生し、この溝を埋める試みがなされるようになってきている。

中国の古典 (『漢書』「王莽伝」など) から解剖が行われていたことはうかがえるが、解剖学は東洋医学においては、ヨーロッパのルネサンスほどの激しい変革には至らなかった。現存する人体解剖図はおおよそ2種類に分けられる：

- (イ) 器官を示す側面からの構造図
- (ロ) 人体内における流体の関係図

☞ 東洋医学における「人体構造図」：張景岳『類経図翼』

☞ 五臓六腑 (『類経図翼』)

☞ (三焦『類経図翼』) 漢書に見られる三焦についての記述には曖昧な点が数多くあり、ヨーロッパ人が解釈に困難を極めたのも不思議ではない。三焦はすでに1603年のイエズス会士による著名な辞書の見出語となっている：

Sanxô [三焦]。身体の三つの部分。すなわち Iôxô, Chûxô, Guexô [上焦、中焦、下焦] 胸から上の部分、中央の部分、それから下の部分。

Guexô [下焦]。身体の下の方の部分。例、Guexô no fiyeta [下焦の冷えた] 身体の下の方の部分が冷えた。

Iôxô [上焦]。頭や頸など、人体の上の方の部分。

Chûxô [中焦]。胸から腰までの間。

イエズス会編『日葡辞書』長崎1603年。(Vocabulario da Lingoa de Iapam [...] Nangasaqui [...] Anno M.D.CIII.)

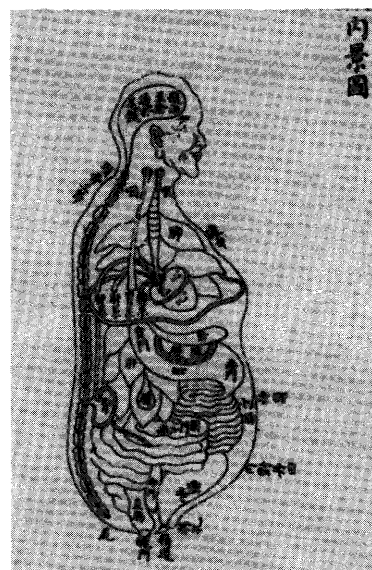
☞ 岡本一抱『鍼灸拔粹大成』元禄11年(1698)

☞ 服部範忠述『内景図説』文化12年(1815)。服部は「人体構造図」の伝統的な形式に加え、注目すべき改訂版を載せている。

この型は解剖をもとに作られたに違いないが、宋の時代からほとんど変わっていない。身体の内景を眺める際、主にいわゆる五臓六腑と脊柱しか注目されなかった。固定的な物体としての臓器や消化管、骨格などが中国医学で無視されていたわけではないが、治療の主目的になることは一度もなかった。

血気の流れを示す人体図(流注図、環中図、明堂図)には一方では全体的な「ネットワーク」(経絡)も見られる。ここでは身体は正面、背面、側面の3方から示されている。器官、脊柱などは含まれていない。身体を生きているままにとらえようとする東洋医学(中医学)では静止した器官でよりも、気が廻り流れる身体を本質的なものとして重要視してきている。

☞ 青木明熙の「解剖図」。青木明熙は黒田藩の御典医を勤めていた。



経絡全体を示すこの図と並び、個々の経脈も記されている。この半裸像は、経脈の様子がよくわかるような姿勢をとっている。身体の表面には筋肉や影のようなものは一切見られない。

☞ 仰人尺寸之図解。伏人尺寸之図解。

☞ 各経絡の図

「経線」(meridian) となった経絡

西洋医学では、東洋医学の経絡に当たるものを発見することができなかつたため、20世紀には地理学に由来する「経線」という名称が生まれた。これにより、人体内の経絡は、身体表面へ「投影」されたようにみえる。この解釈は最近に用いられなくなりつつあるが、経絡の本質について西洋では依然としてさまざまな説がある。

☞ ビシュコ『鍼術の入門』ハイデルベルク、1970—73年。(Johannes Bischko: Einführung in die Akupunktur. Haug, Heidelberg 1970-73)

☞ 表：東洋医学の5行対応表は5要素から成っているが、その形式は古代ギリシア医学の4要素説を思わせる。

体内からの信号

体内から外に表れる「信号」としての脈拍に、さまざまな文化圏の人々が、大きな関心を寄せてきた。西洋ではすでにガレノスが脈拍学を始めている。これはさらに中世の学者たちに引き継がれ、体系化された。東洋の伝統医学でも診脈は非常に重要な役割を果たしている。古典の中では『脉訣』が特に知られている。1659年にイエズス会士数名が中国の広東市で軟禁され、時間つぶしに中国の文献を翻訳したが、この中には『脉訣』もその大部分が含まれていた。そのラテン語訳は1683年、もと出島商館長A・クライヤー (Andreas Cleyer) によって出版された (Specimen Medicinae Sinicae, Frankfurt 1682)。その後、イギリスの高名な医師フロイヤーは『医師の脈脈診』 (The Physician's Pulse-Watch) を出版し、注目を集めることになる。しかし結局は、この脈学は理論的な背景が東西であまりにも異なりすぎていたため、西洋医学へ採り入れられるには至らなかった。

☞ 『図注脉訣統宗』(江戸時代)

☞ フロイヤー『医師の脈診、或いは脈診の古い技術を説明し、脈診の助けによってそれを改善するための小論』 (Floyer, Sir John: The Physician's Pulse-Watch; or, an Essay to explain the Old Art of Feeling the Pulse, and to Improve it by the help of a Pulse-Watch.

Smith & Walford, London, 1707. Copy)

「腫れ物の図」

人体解剖図の他に治療の場面を描写するものや、皮膚に現れる腫れ物を示す人体図もある。

☞ 紅毛流の写本の付けられた伝統的な腫れ物の概略。『和蘭金瘡附請腫物師語』江戸時代

9. 西へ伝わる東洋医学

鍼術に関する初期の記録としてはVOCの医師ヤーコプ・ボントによるものが有名である。ただしボントは鍼についてまだよく知らず、誤解もあったようである。

「私は日本での奇蹟に近い結果について話そう。頭の慢性痛や、肝、膝の障害や肋膜炎に対しても、彼らは銀や青銅で作られた針で、7弦琴の糸より細かい孔をあける。私自身がジャフで見たところでは、針はゆっくり静かに上述のところを反対側に出るまで通すべきである。」

☞ ボント『インドの医学について』ライデン、1642年。(Bontius, Jacobus. De medicina Indorum. Lugduni Batav.: Apud Franciscum Hackium, 1642)

ヨーロッパ人が初めて東洋医学を体験した場は中国ではなく、東南アジア及び日本であった。1603年にイエズス会士が長崎で刊行した「日葡辞典」にはすでに、「捻鍼」、「三焦」、「経絡」、「灸」や「百会」などの専門用語が見られる。当時の書翰などから宣教師たちが鍼灸の治療を受けていたこともうかがえる。しかしヨーロッパでの灸術熱がその口火を切ったのは17世紀後半の書物においてであった：

- (a) ブショフ『痛風と、確実に有効な治療薬について』アムステルダム、1675年 (Hermanus Busschof: Het Podagra, Nader als oyt nagevorst en uytgevonden, Midsgaders Des selfs sekere Genesingh of ontlastend Hulp-Mittel. [...] Amsterdam, [...] 1675)
- (b) テン・ライネ『関節炎に関する論文。鍼術について』ロンドン、1682年 (Wilhelmus ten Rhyne: Dissertatio de Arthritide: Mantissa Schematica: De Acupunctura: Et Orationes Tres. London 1682)
- (c) ケンペル『廻国奇観』レムゴ、1712年 (Engelbert Kaempfer: Amoenitatum exoticarum politico-physico-mediciarum fasciculi 5. Lemgo, Meyer 1712)

出島商館で勤務するヨーロッパ人たちの滞在期間はイエズス会士よりも短く、日本の言葉及び文化について勉強するための条件も大変厳しかった。また、出島の「阿蘭陀通詞」の語学力も元禄頃までは医学書を理解し説明するには不十分であった。そのため、鍼灸の論理的な背景を正確に把握するには至らなかった。

ヨーロッパで初めて鍼灸について言及したのはドイツ人医師エンゲルベルト・ケンペル（1651—1716）であった。彼は日本滞在中（1690—92年＝元禄3—5）に図版入りの文書を手に入れ、通詞だった今村源右衛門の説明をうけたが、患部と治療箇所をケンペルは理解していなかった。

☞ ケンペル『廻国奇観』レムゴ1712年。Kaempfer, Engelbert: *Amoenitatum exoticarum politico-physico-medicae fasciculi 5, quibus continentur variae relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectae. Lemgoviae, Meyer, 1712 (912 S.)*.

ケンペルの図版に携わる銅版彫刻家は、構造を理解していない漢字を左右逆に彫らなければならなかった。読み仮名を付した文字もある。この身体図は「日本式」で、両手両足がまっすぐに伸びている。

☞ ケンペル『日本誌』ロンドン1727年。Kaempfer, Engelbert: *The History of Japan. London 1727.*

ケンペル著の『日本誌』（1727）の付録に見られる身体。ヨーロッパの読者が求める理想的な身体像に応じ、ギリシア古典主義に由来する立足と遊び足を取り入れ、片方の手を挙げて姿勢に力感を与え、禪はイエスを思わせる亜麻布に変えられている。

☞ (イ) ケンペルの手稿（大英図書館、スローン・コレクション）。(ロ) ケンペル『廻国奇観』レムゴ1712年。

ケンペルは疝気で日本の鍼を学んだが、これは中国の経絡観によるものではなかった。彼は鍼を刺す9点の位置を簡単に図示している（イ）。読者の好みに応えるよう、版画家は（ケンペルの了解を得て）官能的な姿勢の日本女性を付け加えている（ロ）。この女性が何を手本にして書かれたのかはわからない。

☞ ヴィレム・テン・ライネ『鍼術について』ロンドン、1682年：「鍼灸のための、身体の前部にある特別な点を示す中国風の図」。(Willem ten Rhyne: *De Acupunctura. London 1682*)

☞ 「あらゆる病状のもとで、灸をすえ鍼を打つための身体の前側面すべての場所をわかりやすく書いている。緑のしるしは鍼の治療点、赤色は灸のためであることを示す」（足の太陽膀胱経だと思われる）。(Willem ten Rhyne: *De Acupunctura. London 1682*)

☞ 「日本の図。痛みや種々の状態のために、焼くべき身体の前面上にある全部の点を示す」。
(Willem ten Rhyne: De Acupunctura. London 1682)

最初にヨーロッパに紹介されたのは日本の鍼である。2種類の型があったのは中国の鍼ではなく、当時の日本人鍼師による独自の発明であった。

打鍼（御園意斎による発明）

管鍼（杉山和一による発明）

打鍼はまもなくすたれてしまったが、管鍼は使いやすく今日でも世界中で評価されている。

☞ 打鍼（御園流、複製）

☞ 出島商館医ヴィレム・テン・ライネ（日本滞在は1674—75）の著書に見られる鍼（打鍼）。テン・ライネは鍼術の訳語として「acupunctura」を考えだした（acu = 鍼、pungere = 刺す）。この語は今日の西洋のほとんどの言語に定着している。(Willem ten Rhyne: De Acupunctura. London 1682)

☞ 近代の管鍼

☞ 18世紀のヨーロッパにおける日本像はケンペルによって形成されたといっても過言ではない。彼の名著『日本誌』の付録には鍼灸を賞賛する記述も見られる。ケンペルはテン・ライネの著作に刺激を受け、さらに詳細な調査を行った。

☞ 博物学者リンネの弟子カール・ペーテル・ツェンベリ（1743—1828）は出島商館医（1775—76、安永4—5）を務めながら、積極的に最新の情報を収集し、特に日本の動植物の分野において歴史に残る業績を残している。ドイツ人ケンペルやシーボルトと並び、スウェーデン人ツェンベリは「鎖国時代」の三大日本学者として高く評価されている。

当時広く読まれた著書『ヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行記』には鍼灸に関する記述も見られる。

☞ ヒューボッター『20世紀初頭の中国医学とその発展史』ライプチヒ、1929年。Hübotter, Franz: Die Chinesische Medizin zu Beginn des XX. Jahrhunderts und ihr historischer Entwicklungsgang. Leipzig 1929.

今世紀になって東洋医学に対する関心を新たに呼び覚ました医師たちの中に中国在住のドイツ人フランツ・ヒューボッター（Franz Hübotter）がいた。漢字には活字がないことも多く、本全

体が複写された。ヒューポッターも中国語の読み書きはできたのだが、16世紀のイエズス会士と同様、経絡を血路と誤って解釈していた。

10. 東へ伝わる西洋医学

ヨーロッパでも敢えて死体を解剖し人体の内部を観察するまでには、長い年月がかかっている。西洋の解剖書は17世紀半ばにはすでに日本に渡って来ており、出島商館医も繰り返し解剖学の重要性を強調していたが、臓器、筋、神経などの位置や特徴よりも、気が流れる身体の中のさまざまなバランスを重んずる東洋医学の影響のもとでは、西洋の解剖図の意義や利用価値は認められなかった。

日本では特に出島蘭館医の外科術が高く評価されていた。そのため、紅毛人はすでに17世紀には長崎と江戸で高官などを往診していた。その治療や口頭による指導をもとに寛永の頃に、いわゆる「紅毛流外科」が誕生した。

ドイツ人外科医カスパル・シャムベルゲル (Caspar Schamberger、1623～1706) が1650年に10ヶ月にわたり、江戸で幕府高官の治療を行ってから、日本では「オランダの」外科学に対する関心が高まった。50年代に生まれた最初の流派は「カスパル流外科」だった。

📖 シャムベルゲル晩年の銅版画 (ライプツィッヒ市博物館)

現存する「紅毛流外科」初期の写本では、解剖学に対する関心はほとんど見られない。病理学も17世紀末までは、伝統的なガレノスの体液論を短く要約しただけだった。日本にはこの体液に該当する概念がなかったため、ラテン語の名称はカタカナで記され、説明も限られていた。

📖 『阿蘭陀外科書』に見られる体液論。『阿蘭陀外科書』(カスパル流外科系の写本、江戸時代)

ヴェスリング著「解剖学書」

ヨーハン・ヴェスリング (Johann Vesling、1598～1649) はドイツ生まれの解剖学者。初版は1633年のラテン語版で、1659年にブラジウス (G. Blasius) の注釈を加えたものがアムステルダムで出版され、同年オランダ語版も出ている。本書は17世紀後半に最も普及した解剖書で、明解な記述と鮮明な図版で知られている。ヴェスリングはわが国ではヘスリングウス (Veslingius) と呼ばれ、山脇東洋がわが国最初の人体解剖に方り図を参照し、また尿生成について独創的な実験を行った伏屋素狄も本書を利用している。ヴェスリングは1632年以降パドア大学の解剖学と植物学の教授となり、その名講義で知られた。

☞ (Veslingius, Joannes: Syntagma anatomicum. 2. ed. ab extrema auctoris manu Patavii Typis Pauli Frambotti, 1651)

「実験」への道を切り開いたのは中国の古典に理論的矛盾を感じ、それを解消しようとした古方派の山脇東洋(1705—1762)であった。宝暦4年(1754)に官許を得た山脇東洋らは京都で「腑分け」を行った。それ以降、日本各地で死体解剖が始まった。

☞ 山脇東洋『蔵志』宝暦9年(1759)刊。(京都市和田和代史博蔵、佐藤裕博士撮影)

明和8年(1771)に江戸で行われた解剖に西洋の医書を持参した杉田玄白や前野良沢らは西洋の解剖図の正確さに驚き、大変な苦勞をしながら、その本を翻訳し『解体新書』として出版した。それをきっかけに本格的な「蘭学」が起こり、西洋医学などは積極的に受容されるようになったのである。

☞ 『重訂解体新書』銅版全図。天保14年(1818)

☞ 『重訂解体新書』：解剖図

☞ 『解体新書』に使われたワルエルダの口絵。『解体新書』の扉絵は、ワルエルダのオランダ語の訳本(1568ないし1614年刊のアントワープ版)の口絵から採ったものと推測されている。(『ヴェザリウスおよびワルエルダの解剖学。人体の各部の図および解説』アムステルダム、1647。)(A. Vesalii en Valuerda Anatomie ofte Afbeeldinghe van de Deelen des Menschelicken Lichaems, en derselver verclaringe. Met een Aenwysinghe om het selve te onleden volgens de leringe Galleni, Vesalii, Fallopii en Arantii. 'T Amsterdam, By Corneliz Danckertzz, in de Calverstaet in de Danckbaerheyt M.DC.XLVII)

晩年の回想録

『蘭学事始』は文化11年(1814)、82歳の杉田玄白が蘭学創始の時代を回想録風にまとめたもの。補筆を依頼された大槻玄澤は、日頃の玄白の話や自分の見聞を織り込み『蘭東事始』として、翌年、玄白に進呈したといわれている。復刻された『蘭学事始』は、明治2年に福澤諭吉が出版した本版本で、その底本は幕末の頃に神田孝年が発見し、玄白の自筆本はこれが唯一のものと信じられていた。



杉田玄白著『蘭学事始』2巻、文化12年(1815)脱稿 明治2年(1869)刊行

永田善吉刻『内象銅版図』

永田善吉(1751—1822)の『内象銅版図』は文化5年(1808)に刊行され、日本初の銅版解剖図として医史学のみならず、洋画の作品としても美術史上極めて重要な資料である。宇田川玄真著『医範提綱』の附図として作られたもので、ステヴェン・ブランカード(Steven Blankaart, 1650—1702)、パルフェイン(J. Palfyn, 1650—1730)、ウインスロウ(J. Winslow, 1669—1760)やヘルヘイエン(P. Verheyen, 1648—1710)の解剖書の図を基にしている。

日本においては言葉の面での問題が大きく、舶来の西洋書の数も少なく、また、医書を古典化する傾向もあったので、ヨーロッパにおける近代医学のダイナミックな発展は長い間日本人の目にあまり触れなかった。そのため、原本と訳本との発行年にかかなりの年数が開いた場合が多い。

永田善吉刻『内象銅版図』：口絵

永田善吉刻『内象銅版図』：解剖図

中国を介して日本へ

日欧学術文化交流における中国の役割は見過ごしてはならない。幕末には中国語による西洋医書が日本の洋医学界に歓迎され、その訓点翻刻本が普及した。その代表的なものとして宣教医として中国へ派遣されたホブソン(Benjamin Hobson, 1816—1873)が著した一連の医書類がある。ホブソン(中国名は合信や霍浦孫)は1847年広東西郊に恵愛医館を開き、医療伝道活動を行いながら『全體新論』を著述している(1851)。1856年に退職してから、さらに『西医略論』(1857)、『婦嬰新説』(1858)、『内科新説』(1858)を刊行したが、健康を害したため1859年イギリスへ帰国することになった。ホブソンは西洋の諸医書を参考とし、骨格模型、紙製人体模型と照合しながら『全體新論』を訳述したと自序において述べている。多くの章にキリスト教のキーワード(「救世主基督」、「新旧約聖書」など)およびキリスト教的思想が見られるにもかかわらず、「鎖国日本」でそのまま翻刻されたことも興味深い。

彼の著書が『全體新論』安政4年(1857)

蘭学から洋学へ

19世紀初頭からは解剖学、外科学、内科学以外の分野が蘭学者の注意を引き、次第に生理学や病理学、眼科学、産科学、婦人科学についての本も翻訳された。それと同時に植物学、薬学、化学や物理学など医学の周辺にある学問の重要性が認識されるようになった。シーボルトなど出島商館の医師による指導や、彼らが持参した道具、資料により、オランダ医学を学びたいという気運が国中で高まっていた。このため優秀な日本人医師たちが私塾を開き、19世紀中頃の牛痘接種の伝来をきっかけに、幕府もようやく西洋医学の有効性を認めるようになった。出島蘭館医ポン

~~~~~

ペがオランダ流の医学教育制度を導入し、後任者グラタマやマンズフェルドがこれを充実させたことにより、近世医学の土台が築かれた。次第にイギリスやフランス、ドイツも、自然科学や軍事技術面にとどまらず、人文科学においても日本の知識人の注目を引くようになり、江戸末期には蘭学は洋学に取って代わられるようになった。

## 11. 新しい生命のイメージ

洋の東西を問わず、新しい生命の由来および成長は常に人々の想像や好奇心を刺激してきた。労働力に頼る社会においては、産科の重要性は大きいのが、多くの研究者が指摘しているように、江戸期の日本人口は暗黙のうちに厳しい産児制限によって強いられてきた。

☞ 妊婦の子宮と胎児：良家の婦人としてこの人物は胸と性器を手で覆っている。(ホルスト『人間の体質について』フランクフルト・アム・マイン、1612年) (Horst, Georg Conrad: De natura humana: quorum prior de corporis structura, posterior de anima tractat. [...] Francof. ad Moenum: Typis Erasmi Kempfer 1612)

オランダの解剖学者ド・グラーフ (1641—1673) は1666年からデルフトで開業しながら、女性の性生殖器の解剖学に大きな功績を挙げている。彼はグラーフ卵胞 (胞状卵胞、folliculi ovarici vesiculosi) の発見者で、その他血管への色素注入法の考案者でもある。

☞ (グラーフ『女性の性生殖器について』ライデン、1672年)。(Graaf, Reiner de: De mulierum organis generationi inservientibus tractatus. Lugduni Batavorum, 1672)

☞ 優美な若い婦人が腹を切り裂いている。左に詳細な図があり妊婦であることを示している。胎児は倒居ではない。(ベレティニ『解剖学の図』ローマ、1741年)。(Berrettini, Pietro da Cortona: Tabulae anatomicae. Romae: Typographia Antonii de Rubeis, 1741)

### 倒立が正常胎位

本書は賀川玄悦の秘伝書『産論』を玄廸 (岡本氏、養子となり玄悦を襲名) がさらに精緻なものにした産科医書。明和3年 (1766) に書かれた『産論』は、賀川玄悦が自ら試みた独特の方術を記したもので、胎児は倒立が正常胎位であることを初めて確認した。『産論翼』の巻末にある32図は「産論」を補い、正常な胎位を示した最初の図として喧伝されるようになった。

玄悦の方術は、賀川流産科という一家を成し、その門下からは原南陽、奥劣齋、佐々井茂庵などの名医といわれる人々が輩出した。また、シーボルトが日本医学を西欧に紹介した際、賀川玄悦の独特の産論についてもふれている。



☞ 賀川玄悦著 賀川玄廸編『産論翼』2巻 安永4年(1775)

☞ 「諸産懷孕図三十二」

## 12. 身体を語ることば

早くから医学においては用語を統一し、その内容を定義することにより医師たちのコミュニケーションを確実にする必要があった。中世の学者が行った古典の研究や解釈が用語辞典の発展に大いに貢献し、18世紀以降、医師以外の知識人のための辞書も次第に増えてきた。

☞ ヴォイト『医学および自然科学の宝殿』ライプチヒ、1751年。18世紀にヴォイトが出版した一般向けの医薬学用語辞典はすでに2380ページある。(D. Johann Jacob Woyts Gazo-phylacium Medico-Physicum, oder Schatz-Kammer Medicinisch- und natürlicher Dinge [...]. Leipzig bey Friedrich Lanckischens Erben 1751.)

☞ 紅毛流の写本に見られる語彙集。ラテン語、ポルトガル語、オランダ語が混ざっている。

☞ 19世紀の医書。ここでは西洋の用語をすべて日本語に翻訳しようと試みている。

### 言葉の遺産

近代医学が発達した後も、ギリシア・ガレノス派の体液論に見られる語は、医学に限らず日常語にも多く生き残っている。意味がかなり変わってしまうことも多い。日本語に外来語として取り入れられたものもある。

☞ 医学の発展のようすは、現代語にもその痕跡を留めている。たとえば日本語では体内の現象を表すことばは、ほとんどが中国語に由来している。英語やドイツ語でも事情は酷似している。体内器官にゲルマン語はほとんど見られない。

「気」の哲学に影響され、今日でも日常会話に語や用法が頻繁に見られる。日本語や中国語を学ぶ欧米人にとってこの隠喩を理解することは容易ではない。

☞ 心臓は特に感情の所在する所と考えられていた。今日でも西洋語には、この昔からのイメージに由来する言い回しがたくさん残っている。

☞ 恋するのは、アモルの矢が心に刺さったからだ。

## 日本人の「腹」

☞ 一連の関連表現からわかるように、腹の部分には感情や考え方、意図などが集約している、と伝統的に考えられていた。

## 13. 百科事典に見られる身体

### 知識の全て：「encyclopaedia」

1500年前後に生まれた「encyclopaedia」(enkyklios=円満、paidea=教育)という語は、ヨーロッパでは17、18世紀以来、体系的に整理された広範な教養を表している。同時にその時代あるいはある分野の知識全体を包括した書物も百科全書と呼ばれるようになった。

最初の百科全書はプラトンの弟子が編集したと言われ、プリニウス(3世紀)による『博物史』(Naturis Historia)が有名。ルネサンス期の書名に、初めて「encyclopaedia」という名称が使われている。啓蒙思想の広がりにつれて百科全書はそれぞれの国語に出版されるようになり、アルファベット順配列、相互参照が用いられるようになった。ディドロと百科全書派が1750年代に編集した書物は事典学の傑作として、「encyclopaedia」(百科全書)という語を一般に定着させた。

☞ ディドロ、ダランベール編『百科全書』パリ1751-1772年(初版、法学部附属図書館蔵) ヴェサリウス以降の描写法をまとめた、豊富なイラストを含む百科全書の第x巻(「外科学・解剖学」)は、世界的に高く評価され、長い間百科全書の基準となった。(d'Alembert, Jean-Baptiste / Diderot, Denis: Dictionnaire Raisonné des Sciences. Paris 1751-1772)

### 東の智恵箱

中国の『類経』の方式はプリニウスの『博物史』に大変似ている。有名になったのは明の李時珍が編集した『本草綱目』である。江戸時代では中村惕斎の『訓蒙図彙』(寛文6年、1666年)の一冊が元出島蘭館医ケンペル(Engelbert Kaempfer)により18世紀のヨーロッパで紹介された。正徳か享保のころ刊行された図入りの『和漢三才図会』は江戸時代の生活風俗の調査に必携の書となっている。和氣仲安門で大阪住の医者、法橋寺島良安が30余年をかけて編纂したものである。所収項目は天・人・地の「三才の大部」に分類される。巻7から巻54までは「人の大部」で、東洋医学の精神において人体を詳細に披露している。図についての記述は学問的な立場よりは、常識的立場を取っている。

☞ 寺田良安『和漢三才図会』